患者さんとの何気ない会話

A さんは手術後のドレーン交換のために何度か透視室へ来室した。パジャマや室内着を着ることはなく、いつもゆったりとした素敵なワンピースなどを着用し、お洒落にこだわりのある人だと思った。ある日、処置前で緊張した面持ちの A さんに「いつもパジャマでなく素敵なワンピースを着ていますね」と声を掛けた。すると「えっ？そんなふうに言ってもらえて嬉しい」と笑顔が見られた。私は、処置の合間にも服装の好みやお孫さんのことを話して、少しでも辛い処置から意識をそらすように努めた。処置後に「病棟の看護師さんたちは痛いですか？ご飯どれだけ食べましたか？とか決まった事しか聞いてこない。仕事で聞かなきゃいけないこともあるし、忙しいのはわかってはいるけど、私になんて興味が無いと思えちゃう。でも今日は楽しかった」と言って退室した。確かに忙しくおしゃべりをしている暇はない時もあるが、聞きたいことを質問しにくるだけの看護師が自分を気にかけてくれているとは思えないだろうし、ADL も自立した A さんは看護師に関わってもらう時間も少ないだろう。A さんの言葉から寂しい思いをしていることが理解できた。

後日も A さんは違ったワンピースを着て来室された。「今日のワンピースも可愛いですね」と声かけすると「ここは痛いし怖いけど、褒めてもらえるから頑張らなくちゃね」と笑顔で処置台に移動し、「あなたに褒めてもらったお陰で、つまらなかった入院生活に少し張りができたわ。退院して近所の人にあの人病気して老けちゃったね～なんて言われるのは嫌だし。入院中もちゃんと綺麗にするわ」と言う A さんに「美容外科で手術してきたの？って言われるくらい磨きまくって下さい」と返すと「美容整形～？」と大笑いされ「久しぶりに笑ったわ～。孫とショッピングに行ってお母さんと間違われるくらい頑張るわ」とガッツポーズをして見せた。笑うのが久しぶりなんて･･･また少し気の毒で悲しくなった。

いつも検査や処置中の患者には出来る限り不安の軽減に努めるような声かけを行い寄り添い、患者の訴えには傾聴を心がけている。しかし、それだけでなく疾患や治療に関係ないこうした何気ない他愛のない会話も大切だと改めて感じた。独居老人、面会制限で以前のように家族と会えない入院患者、コロナ禍で人と接することが減ってしまった人、カーテンで締め切られ、同室患者とも会話しない入院患者など他者と話す機会が少ない患者も増えている。そして、A さんのように医療者の言葉や態度･反応が事務的や一方的であったりして寂しい思いをする患者も少なくはない。忙しく業務に追われゆっくり話をする時間がない時も多々あるが、可能な限りこの他愛のない「おしゃべり」で患者を癒やし、自分が気にかけてもらえていることに安心してもらえるような関わりが出来る看護師で在りたい。